

治療展望

Development of severe asthma treatment

岩永 賢司・東田 有智*

Takashi Iwanaga

Yuji Tohda

近畿大学医学部内科学(呼吸器・アレルギー内科部門)准教授・主任教授*

Summary

重症喘息に対し、新しい治療薬やインターベンションが臨床応用されるようになってきた。特に好酸球・タイプ2炎症をターゲットとした薬剤の開発が盛んである。今後は医療経済の観点から、あらかじめその治療が有効であるかどうかを予測するバイオマーカーの研究も必要である。

Key words

重症喘息, 抗IgE抗体, 抗IL-5抗体, 抗IL-4抗体, 気管支サーモプラスティ

はじめに

治療に難渋する重症喘息に対し、最近の研究の進歩によって新しい治療薬やインターベンションが臨床応用されるようになり(表1), さらに種々の有望な薬剤が治験中である。気管支拡張薬, オマリズマブを嚆矢とする抗体医薬, 抗体医薬以外の薬剤, さらに気管支サーモプラスティなどを中心に、重症喘息の治療展望について概説する。

I すでに発売された重症喘息治療薬： 長時間作用性吸入抗コリン薬¹⁾

長時間作用性吸入抗コリン薬(チオトロピウム)は、ムスカリン受容体(M1, M2, M3)のうち、気道平滑筋に局在するM3受容体を阻害することによって気管支拡張効果を示し、2004年から慢性閉塞性肺疾患(COPD)治療薬として本邦で使用されている。最近、チオトロピウムの重症喘息患者に対する臨床研究[中・高用量吸入ステロイド薬(ICS)/長時間作用性 β_2 刺激薬(LABA)でコントロール不良の重症喘息患者に対する短期効果(8週間投与)²⁾、長期試験での有効性³⁾]が報告され